森の名手・名人シリーズ 49

林業
僕にとっての林業

名人 大野 公之（62）
岐阜県関市

聞き手 河村 純太
静岡県立田方農業高等学校2年
平成29年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が認定されています。岐阜県においては、現在、51名の「森の名手・名人」が認定されています。

この「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

1.「石の上にも七年」

昭和58年に入社した当時は、10時にご飯なんですよね。それから、2時にご飯。2回ご飯を食べるというのは、いかに重労働やったかということですよ。そこで一服しないと1日が持たないくらいの重労働でした。僕がこんな危ないことをするのかと思うことでも、親方らはもう、普通にやってましたね。何にも危なくない。

例えば、トビで山から伐採したものを落としてくる。トビをポンッと木に打って、それを引いて全部並べてワイヤーかけて、トラックに積み込むという一連の作業なんですね。で、問題は木を落とすところが崖なんですよ。トビが外れたら谷底に落ちてくんですよね。それを後ろなんて見いひんで、親方らはポーンと打って。すると、体が反ってしまって完全に頭が谷底に向いてしまってるんですよ。「それでも俺のトビは外れんぞ」と。外れたら落っこってってまうもんね。僕はそんな怖いこと出来やへんもんで、打ってちょっと動かして大丈夫かなって動かしとると、3倍も5倍も時間がかかるんですよ。で、皆さんがいとも簡単にやることがどうしても俺は失敗をしましたでね。どうして俺は迷惑ばっかりかけとるんやろって、もうそりゃ2、3か月そればっかでしたね。けど、それをね「石の上にも三年」ちゅうけどね、僕はね7年やと思いますね。「生懸命やってやっとね、自分で、あっ俺は山師やなと、材木屋でやっていけると、実感出来たのは7年でしたね。

2. 林業機械の導入

あるとき親方が古くなったんでクレーンを替えると言われたんで、僕はグラップルにされたらどうやろと言ったんです。でも昭和の初めの生まれの方は自分がやってきたやり方が一番いいと頭の中に描いてみえる。そうすると、僕がどんだけ言っても理解して頂けなくて。だってクレーンやと、大きい木なんか大変ですわ。トビで木を揃えて、ワイヤー掛けてクレーンでつってもらう。ここで荷造る人、クレーンに乗る人、それから、トラックの上に1人おらないかん。下ろしたときにワイヤーを外さなあかん。するとどうしても、3人いるんですよ。で、例えば僕やってきましたけど、雨が降ったとき、自分で行って自分で積んで走ってくるんですよ。そのときにグラップルがあれば1人で出来るのになってのがありましたね。クレーンだと、自分でワイヤー掛けて、トラックに載せてトラックに登って、ワイヤーを外して、それからまたきれいに並べたところでワイヤー抜かないといけない。クレーンでワイヤー抜いとると、せっかく並べたやつがコロンとまくれてしまう。だから、自分で会社を始めてやっとグラップルが入って嬉しかったですねぇ。凄く仕事の出来方が違う。たった1台で人間の5人ぶんくらいになるんじゃないかと僕思いますね。

その次に平成19年にハーベスタを導入したんですよね。10人人を使うかハーベスタ1台かというぐらい違いますね。古くなってくれば故障もしますけど新しい頃はそれはもう気持ち良いくらい仕事して。ウチは小さな会社ですので、3人でやってたんですよ。僕とそれから番頭が1人おって、もう1人女の子がいたんですよ。その女の子がハーベスタに乗って、番頭が僕が伐った木をグラップルで出す。その流れでやって、岐阜県では3人ばかりでこれだけの生産を出来るのかとある程度認めてもらえたような気がしますね。で同じときにスイングヤーダも購入しました。グラップル、スイングヤーダ、ハーベスタ、この3台で道を作って間伐をずっと10年ほどやってきたんですよ。

けど、道づくりが難しい山もたくさんある。急な山はどうしようかということになる。そうすると次はタワーヤーダで道づくりができないとこを攻めてこうやないかとタワーヤーダを取り入れた。タワーヤーダは今皆さん好評で、導入に向けて一生懸命試行錯誤されとるみたいですけど、ウチはいち早くそれが導入出来ました。

木を伐る、枝を落とす、木を運ぶ、などの仕事を1台で行える「ハーベスタ」

伐った木材を運び出すときに活躍する「フォワーダ」

山にワイヤーロープを張って搬出する「タワーヤーダ」

3. 今と昔の林業

僕が入ったときには、木を伐って出すには集材機とレッカー、この2つがあればやっていけた時代です。消耗品はワイヤーだけやもんで。常に使えるうちは使って、で1年使ったで、新しいやつ買おかなんていう時代だったんですよ。ところが今は機械機械で、燃料も高くなってきた。人件費も高くなってきた。機械も修理すると高い。で、肝心な材木は安いと。これどこで帳尻を合わせたらええんやろと。そしたら、量を出さなければ僕らの生きる道はない。そしたら間伐ですよね。山中に木がある。じゃあここに道をつけて10本あるうち3本伐りましょう。それで生産性、採算性を合わしてくわけですけど、なかなか難しいところがありまして。国の方も考えて、補助金を出すようになった。そうせんと日本の山自体が衰退してしまうと。その補助金を頼りに今まではやってきたんですけども、それもいつまで続くか分からん。

そこで、山を実際に買って、皆伐してしまおうと。皆伐やったら、何も制限をされず全ての木を伐ってしまって、新たに植林をしたらええんやと方向転換を。しっかりとではないけれど、しつつある。でも、一気に体制を変えるのは非常に難しい。山を3年も5年も先まで買っていけるのか。仕事量を確保出来るのかということが非常に不安です。

伐採する前の山と、名人がきれいに木を伐採したあとの山

4. 責任を持つということ

木というのは伐ってなんぼ、出してなんぼや。そしたら、伐るのを自分が役割分担。で、番頭に出せよと、女の子はハーベスタで造材ていうシステムを組んでましたわ。やはり、機械も今日はこれ乗った、明日は誰が乗るで、入れ違いで乗っとると責任てもんがないじゃないですか。だからウチはナンバー1はお前の機械やぞと。ナンバー2は誰や、ナンバー3は誰やというふうにしてくと皆がもの凄くきれいにするし大事にする。

10年経ってこの傷みような?ってみんなビックリされる。で、故障という故障はないですからね。番頭はん乗っとるやつが7800時間かなんか。10年も乗ればそのくらいになりますよ。そうすると、もうそろそろ、買い替えの時期ですよとメーカーがみんな言ってくるんやけど、ウチは大丈夫やで、ほっといてと。資金もないし。よく壊れずに他のとこよりも倍動けてる。それはやっぱりお前の機械やぞというふうに与えるということ。ほれちょっとといて俺やるで、なんて乗り出すと、責任がなくなってしまいますんでね。

5. 10を教えてはいけない

この4月から次男が一緒に仕事に来るようになって、僕のやり方を見て覚えよと言うんですよ。皆にはそんなふうはダメだよって言われる。でもやっぱり背中を見て覚えるとか、こうやって伐ったらいいふうに伐れたなとか、色々やり方があって、その全部10教えるところを10教えたら、7くらいしか出来んと僕は思うんですよ。僕の親方は10教えるとこがあったら1しか教えなかったんですね。で、こうやってやるんや。やってみよ。みたいなとこで、知らん顔しとるんですよ。自分は自分の仕事なんですよ。ほんで、自分でやってみて失敗するやん。すると、なんでやろ、言われた通りやったのに、て考える。そうして含みをもの凄く入れて、10超えて12、3くらいまで自分の頭ん中で考える。すると次から失敗しない。

でも、今の若い人らを育てるにはそんなやり方は通用せんかもしれん。じゃあせめて、10のうち半分教えてやらないかんなと。でも半分というのは難しいとこで、どこが半分なのかさっぱり自分でもまだ分からんような状態ですわ。で、結局みなさんは10のうち10を教えると思いますよ。で、一生懸命教えるやないですか。やる前から教えて教えて、自分はこれだけ言ったのに出来なんだら今度反対に怒るやん。すると、ああ、あの親方は凄い人やったなと僕感謝しとります。

6. 伝えたいこと

今ではどの産業でも機械化が進んで、林業も高性能林業機械を使っての作業が中心になってきました。ちょうどその過度期から今に至るまで林業に携わってきて、その中で自分が得た技術を、次男を含め次の世代につなげていくのが今の自分の使命だと思っているし、ぜひとも継承していきたいと思ってます。

名人 大野（おおの） 公之（きみゆき）さんのプロフィール

- ●生年月日：昭和30年5月16日生まれ
- ●職業：林業

岐阜県関市の農家に生まれ、高校の教師を経て、昭和58年にカネキ野村木材店に入社。

平成10年に有限会社カネキ野村木材店代表取締役を経て、平成23年には株式会社カネキ木材代表取締役に就任。

高性能林業機械を積極的に導入し、主伐を中心に年間3～4,000㎥の素材生産を行っている。近年は、ハーベスタを使用した効率的な作業システムを展開。

自身は、大径木の伐採に極めて高い技術を有し、平成28年まで岐阜県森林技術師連絡協議会会長として、林業技術の普及に尽力するとともに、関市の森林づくり委員や森林教室の講師などを務め、地域林業の振興に貢献している。

平成29年には次男を入社させ、後継者育成にも努めている。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
公益社団法人
岐阜県緑化推進委員会　専務理事　黒﨑隆司】